

Divyāvadāna 第26章所収ウパグプタの物語試訳

-猿の瞑想・娼婦への教化・マールへの教化-

岡本健資

はじめに

以下に和訳を試みるウパグプタ上座についての物語は、『ディヴィヤ・アヴァダーナ』(*Divyāvadāna* 以下 Divy.) という説話集の第二十六章「パーンシュプラダーナ・アヴァダーナ」(*Pāṃśupradānāvadāna*) の前半を占める。この物語の中で、ウパグプタはブッダによって、「自分の般涅槃の百年後に現れる」と予言され、また、「無相のブッダ」とも呼ばれ、教化に勝れた人物とされる。更に、Divy. の第二十七章「クナール・アヴァダーナ」(*Kunālāvadāna*) の中では、彼がアショーカ王からブッダと等しい存在として讃えられ尊敬されたことが語られ、アショーカが仏跡巡礼を行う際には案内者としての役割も果たしている。ウパグプタの活躍の詳細を示す文献としては、Divy. の他に、『阿育王伝』や『阿育王経』が挙げられるが、*Mūlasarvāstivādinaya* の *Bhaiṣajyavastu* (漢訳では『根本説一切有部毘奈耶藥事』) や『大莊嚴論経』、そして『賢愚経』等にも彼についての物語が収められており、彼の物語が広く流布していたことが知られる。

さて、すでに述べた通り、Divy. 第二十六章の全体の半分を占めるこのウパグプタの物語は、大きく分けて三つの部分から成り立っている。

第一部は、ブッダによって語られるウパグプタの過去世物語である。物語の導入として、ブッダは自分の般涅槃の百年後に、教化に勝れたウパグプタという人物が現れるとの予言をアーナンダに語り、続けて、ウパグプタによる教化活動は過去世においても行われたとし、ウパグプタの過去世物語を語る。この過去世物語の中では、ウパグプタは猿として登場する。この猿は苦行者達の行っていた苦行を止めさせ、彼らを辟支菩提に導く。

第二部は、ウバグプタがブッダの般涅槃の百年後に世に現れた時の物語である。この中では、彼は香を扱う商人の三番目の息子として生を受ける。彼は成長し家業に従事していたが、彼に関するブッダの予言を知っていたシャーナカヴァーシンという名の比丘から、心の状態を清浄にするための訓練法を教わり、それを実践した彼は自らの心の状態を浄らかなものとする。或る時、彼に懸想していた娼婦が罰を受け四肢を切断されたのを聞いた彼は、その娼婦に会いに行く。彼は、そこで娼婦に対して身体についての不浄を説示する。それによりその娼婦は預流果を得るが、同時に彼自身も娼婦に対して説示した法によって不還果を得る。

第三部は、シャーナカヴァーシンに導かれウバグプタが出家し阿羅漢となった時の物語である。ウバグプタが説法を行っていた時、マーラは様々な妨害を行う。その時、ウバグプタは「ブッダがマーラを調伏しなかったのは何故だろうか」と考え、「それは、私がマーラを調伏することを知っていたからである」ということを知る。そこで、マーラを調伏するために神通力を駆使し、動物の屍を花輪に変化させてマーラの身体に結びつける。マーラは自らに結びつけられたのが動物の屍であることを知り、外そうと試みるがどうしても外すことができない。結局、マーラはブッダの弟子の能力の偉大さを知ることになる。一方で、マーラは、ウバグプタ以上の力を持っていたはずのブッダが、自分によって苦しめられたにも関わらず罰を与えなかったのは、ブッダの大悲の故であると悟る。ウバグプタのもとに帰ってきたマーラは「ブッダは悲によって自分を許したが、あなたはその悲を捨て去ったので自分は笑い者になった」と述べる。ウバグプタは「声聞には大悲は存在しない」と叱責し、更に「ブッダがお前を許した理由は、ブッダに対する悪行を浄化する手段が、ブッダに対する信を除いて存在しないためであり、先見の明を持つブッダは、信を抱いている今のお前の姿を知っていたので、お前を調伏しなかった」という内容を述べる。マーラは心が浄らかとなり、ブッダの美德を回想する。そして、マーラはウバグプタに屍を外してくれるよう求める。屍を外す条件として、ウバグプタは、自分が見ることができなかったブッダの色身を示す様に求め、マーラは言われるままブッダの色身を示す。

以上の三つの話を眺めると、個々のテーマが見出せる。すなわち、苦行者の話では、苦行の放棄がテーマとされており、娼婦の話では、不浄観が、そして、マーラの話では、ブッダの大悲とブッダへの信がテーマとされているようである。しかし、いずれもウバグプタの教化能力の素晴らしさへの賞讃で結ばれており、彼がいかにして教化をなしたかを示す点に主眼が置かれていることが伺える。

翻訳に際して

以下に、翻訳にあたって使用したテキストと、引用または参考にした主な資料を以下に挙げる。尚、翻訳する際に底本としたテキストは P. L. Vaidya 氏によるエディションである。

【梵文原典】

- *The Divyāvadāna: Collection of Early Buddhist Legends*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge, 1886; Reprint Delhi: Indological Book House, 1987, pp. 348.5-364.15.
- *Divyāvadānam*, Buddhist Sanskrit Texts, no. 20, edited by P. L. Vaidya, Darbhanga, Bihar: Mithila Institute, 1959, pp. 216.2-229.4.
- *The Aśokāvadāna: sanskrit text compared with chinese versions*, edited by S. K. Mukhopadhyaya, Delhi: Sahitya Akademi, 1963, pp. 1.2-28.18.

【漢訳】

- 『阿育王伝』巻第三・巻第五（大正 50, No. 2042, pp. 111b28-112a7, 117b23-120b6）.
- 『阿育王経』巻第六・巻第八（大正 50, No. 2043, pp. 149b25-150a8, 157b7-161a24）.

【翻訳及び研究】

この物語の現代語訳としては以下のものが存在する。

- John S. Strong, *Legend of King Aśoka: A Study and Translation of the Aśokāvadāna*, Princeton: Princeton University Press, 1983, pp. 173-198.
- Heinrich Zimmer, *Karman: Ein Buddhistischer Legendenkranz*, München: Verlag F. Bruckmann A.-G., 1925, pp. 175-194.

ウパグプタに焦点をあてた詳細な研究としては、Strong 氏によるものが存在する。

- John S. Strong, *The Legend and Cult of Upagupta: Sanskrit Buddhism in North India and Southeast Asia*, Princeton: Princeton University Press, 1992.

【根本有部律】

Divy. には根本説一切有部律（Mūlasarvāstivādinaya, 以下 MSV）との間に平行話

が多く確認されことは既に指摘されている⁽¹⁾。この物語も部分的であるがMSVの中のBhaiṣajyavastu(漢訳としては『根本説一切有部毘奈耶藥事』)と一致する箇所が確認できるので、これを参照しつつ、必要に応じて註記を付すことにした。使用したのは以下のテキストである。

[梵文原典]

- MSV: *Gilgit Manuscripts*, edited by N. Dutt, 4 vols., Srinagar (I-III) and Calcutta(IV), 1942-1950: Reprint Delhi: Satguru Publications, 1984, vol. III-1, pp. 3.12-7.13.

[蔵訳]

- *The Tibetan Tripitaka*, Peking Edition, No. 1030, Ge 113a1-114b6.
- *The Tibetan Tripitaka*, Taipei Edition, No. 1, Kha 122b5-124b4.

[漢訳]

- 『根本説一切有部毘奈耶藥事』巻第九(大正24, pp. 41c18-42b26)。

【関係資料】

今回の翻訳では比較対照を行わなかったが、今後、対照する必要がある資料を以下に挙げる。

- 『大莊嚴論經』巻第九(大正4, No. 201, pp. 307b29-309b26)
- 『賢愚經』巻第十三(大正4, No. 202, pp. 442b13-443c24)
- Upaguptāvadānam, in *Avadānakalpalatā of Kṣemendra* (vol. II), Buddhist Sanskrit Texts, no.23, edited by P. L. Vaidya, Darbhanga: Mithila Institute, 1989, pp. 449-453.

< 略 号 >

Divy(CN): *Divyāvadāna*, edited by E. B. Cowell and R. A. Neil

Divy(V): *Divyāvadāna*, edited by P. L. Vaidya

Mukh.: *Aśokāvadāna*, edited by S. K. Mukhopadhyaya

P: The Tibetan Tripitaka, Peking Edition

D: The Tibetan Tripitaka, Taipei Edition

⁽¹⁾平岡聡『説話の考古学』東京：大蔵出版，2002年，pp. 116-134。

『王伝』:『阿育王伝』

『王経』:『阿育王経』

『薬事』:『根本説一切有部毘奈耶薬事』

訳文中の [] 内の数字は Divy(CN). の頁数。 < > 内の数字は Divy(V). の頁数である。また、脚註に引用する Divy. のサンスクリット文に関しては、翻訳に影響する重要な相違が存在しない限り、Divy(V). の文のみを挙げる。

< Divy. 第 26 章所収ウパグプタの物語和訳 >

かの者 (= ブツダ) は、自らの肉体によって諸の供犠を行って、かの長きに渡り、悲によって、世間の人々の利益のために〔実践をなした〕。彼の努力を実りあるものにするために、正しき者達よ、今、語られつつある浄められた〔話〕を聞け⁽²⁾。 //1//

「以下の様に私は聞いた。ある時、世尊はシュラーヴァスティーに居られた」と、経 (sūtra) は語られねばならない。⁽³⁾

世尊・如来の口〔という〕雲の裂け目から発せられた言葉〔という〕雲からの雨水の落下によって貪・瞋・痴・慢・誑・諂という泥の堆積を排除した〔師達〕、言葉の規則をはじめとする論理についての議論の内容に対する観察によって智慧の光を生じ、いかなる議論における見解についての暗闇を〔も〕排除した〔師達〕、輪廻における渴愛を断ずる最勝の妙法という飲み物を飲むことに親しんだ師達の面前で教導をなす者であり、シャクラ・ブラフマン・イーシャナ・ヤマ・ヴァルナ・クベラ・ヴァーサヴァ・ソーマ・アーディティヤ〔といった神々〕によっても教えを妨げられず、欲望と傲慢とを排除する勇者であり、偉大な人物にして、非常に偉大な神通を有するウパグプタ上座に関して、目覚めた人々の心を浄らかにする、法に則った或る話を〔私達は〕先ず憶念することに致しましょう。

⁽²⁾原文では saṃmārjitaṃ śrṇuta saṃpratabhāṣyamāṇam となっている (Divy(V). p. 216.5; Divy(CN). p. 348.7-8)。Strong 氏は、Mukh. に従い、saṃmārjitaṃ 「浄められた」を sāvarjitaṃ “devotedly” (Strong, *Legend of King Aśoka*, p. 176) とする。また、『王伝』と『王経』にはこの偈に相当する文は無い。

⁽³⁾平川彰氏は、広律編纂者は因縁談についてはその事実性をそれ程重要視しておらず、戒や学処の制定の場所について重要視する必要がなかったと指摘し、その根拠の一つとして、『十誦律』(大正 23, 288b-c)・『根本説一切有部毘奈耶雜事』(大正 24, p. 328c)・『摩訶僧祇律』(大正 22, p. 497a) の事例を挙げる(『律蔵の研究』東京:山喜房仏書林, 1960 年, pp. 319-320)。それらの事例においては、経典の説処や学処の制処が知られない場合、六大城(『摩訶僧祇律』では八大城)のいずれかを随意にとって述べればよいとされている。Divy. におけるこの文言もそれらの律典の記述に類する事例である。

そこで、まず、注意深き耳でもって、師達により〔以下の様に聴聞が〕なされるべきである。

猿の瞑想

以下の様に聞いた。

世尊は、般涅槃の時節にパララ・ナーガと〔ナーガである〕⁽⁴⁾クンバカーリーとチャンダーリーとゴーパーリーを教導して後、マトゥラーに到着した⁽⁵⁾。そこにおいて、世尊はアーナンダ具寿に告げた。

「アーナンダよ、ここマトゥラーにおいて、私の般涅槃の百年後、グプタという名の香商が居るであろう。彼（＝グプタ）にはウバグプタという名の息子が居るであろう。〔349〕彼（＝ウバグプタ）は無相のブツダ（*alakṣaṇako buddho*）であり、私の般涅槃

⁽⁴⁾原文は *yadā bhagavān parinirvāṇakālasamaye palālanāgaṃ viniya kumbhakārīṃ caṇḍālīṃ gopālīṃ ca, teṣāṃ mathurām anuprāptaḥ* である (Divy(V). p. 216.13-14; Divy(CN). p. 348.20-22)。まず、パララという名のナーガに関しては、Divy(V). が...samaye palālanāgaṃ (p. 216.13) とする箇所を Divy(CN). は、...samaye palālanāgaṃ (p. 348.21) とし、palāla ではなく apalāla という読みを採用している。この文章と殆ど同じものが Divy. 第 27 章 Kuṇḍālavādāna にも見られ、ここでは apalāla (Divy(V). p. 244.21) の語が見られることから、ここでの「パララ」という名のナーガは「アパララ」を指すと考えられる。また、他の固有名詞に関しては、『王伝』では「昔者佛在烏長國降阿波波龍。於闍賓國降化梵志師。於乾陀衛國化真陀羅。於乾陀羅國降伏牛龍。於是復往末突羅國告阿難言。」(p. 102b13-16)、『王経』では「是時佛欲涅槃化阿波羅囉龍王。及瞿波羅囉旃陀利龍王竟。至摩偷羅國。」(p. 149b25-26)、『雜阿含経』では「佛臨般涅槃時。降伏阿波羅龍王。陶師。旃陀羅。瞿波梨龍。詣摩偷羅國。」(大正 2, p. 165b21-23) という文章が存在する。『王伝』では「クンバカーリー (kumbhakārī)」の語は見られず、代わりに「梵志師」という語がある。また、「チャンダーリー」を「真陀羅」として龍を付さないが、「ゴーパーリー」にあたる語には龍が添えられ「牛龍」とされる。『王経』では「クンバカーリー」の語は無いが「瞿波羅囉旃陀利龍王」とされ、「チャンダーリー」と「ゴーパーリー」とは龍王とされている。『雜阿含経』では「陶師。旃陀羅。瞿波梨龍。」とし、「クンバカーリー」の意訳「陶師」が見られるが、この文章からは、「ゴーパーリー」が龍と扱われているということはわかるが、「陶師」すなわち「クンバカーリー」と「旃陀羅」すなわち「チャンダーリー」までを龍とするべきか否かは判定し難い。しかし、『王経』が「ゴーパーリー」と「チャンダーリー」を龍と判断していると考えられるので、ここでは仮に「クンバカーリー」、「チャンダーリー」、「ゴーパーリー」までを龍と判断して訳出する。

⁽⁵⁾原文は *teṣāṃ mathurām anuprāptaḥ* (Divy(V). p. 216.14; Divy(CN). p. 348.22) である。ここで、指示代名詞 *teṣāṃ* が指す対象は不明である。Mukh. (p. 2.2) もこの語を記しているが、特に註記を付していない。漢訳は何れもこの語にあたる訳語がない。ここでは、*teṣāṃ* の語を無視して訳すことにする。

槃の百年後、⁽⁶⁾ブツダの責務を果たすであろう⁽⁷⁾。彼 (=ウパグプタ)の教誡によって、多くの比丘達があらゆる煩悩を捨て去って後、阿羅漢果を証得するであろう。彼ら (=多くの比丘達)は、奥行きが十八ハスタ⁽⁸⁾、幅が十二ハスタ⁽⁹⁾の〔洞窟を〕、長さ四アングラ⁽¹⁰⁾の麻の断片でもって供養するであろう⁽¹¹⁾。アーナンダよ、私の教誡者としての声聞達の内の最勝者は、実にこのウパグプタという比丘なのだ。アーナンダよ、お前は遙か遠くに、とりわけ青い稜線を見ることができるか。」「と。〕

〔アーナンダは答えた。〕

「はい。大徳よ。」「と。〕

〔ブツダは言った。〕

⁽⁶⁾MSV ではこの位置にśāsane pravrajya (p. 4.4); bstan pa la rab tu byung nas (P. 113a5; D. 123a2)「私の教えにおいて出家して」という文が挿入される。『薬事』も「於我法中出家。」(p. 41c27)と記す。

⁽⁷⁾原文では Divy(V). は buddhakāryaṃ bhavi(kari)Syati (p. 216.16)とし、Divy(CN). は buddhaṃ kāryaṃ bhaviṣyati (p. 349.1-2)とする。Divy(CN). は note 1 の中で、写本に従えば buddhaṃ kāryaṃ bhaviṣyati であるが、buddhakāryaṃ kariṣyati と読むべきとしている。また『王伝』では「種種化導而作佛事」(p. 102b19)とされ、『王経』では「當作佛事教化多人證阿羅漢果。」(p. 149b29)とされる。ここでは漢訳及び Divy(CN). の note における指摘に従い、buddhakāryaṃ kariṣyati として訳す。また、MSV ではこの文章の直後に mādhyandino nāmnā ānandasya bhikṣoḥ sārđhaṃ vihārī/ sa upaguptaṃ pravrajāyīṣyati/ (p. 4.4-5; P. 113a6; D. 123a2-3)「アーナンダ比丘と共に住するマーディヤンディナという名の者、彼がウパグプタを出家させるであろう。」という文章が挿入される。MSV ではウパグプタを出家させるのは、Divy. に見られるシャーナカヴァーシン上座ではなく、マーディヤンディナという名の比丘である。『薬事』では、「時有阿難陀弟子。名未田地。度彼近密。而為?芻。」(p. 41c28)とあり、未田地は阿難の弟子ということになっている。

⁽⁸⁾長さの単位。

⁽⁹⁾MSV では更に、ucchrāyeṇa sapta (p. 4.8; P. 113a7; D. 123a3)「高さ七〔ハスタ〕」の語が付加されている。『薬事』(p. 42a1)も同様である。

⁽¹⁰⁾長さの単位。

⁽¹¹⁾śaṅakābhiḥ (Divy(V). p. 216.18; Divy(CN). p. 349.4)に当たる語を、Mukh. ではśalākābhiḥ「棒」(p. 2.8)とする、また、pūjayīṣyanti「供養するであろう」(Divy(V). p. 216.18; Divy(CN). p. 349.5)に当たる箇所を Mukh. は guhāṃ pūrayīṣyanti「洞窟を満たすであろう」(p. 2.8-9)とし、guhāṃ「洞窟を」という語を補い、更に pūjayīṣyanti を pūrayīṣyanti としている。MSV では [yadā sā guhā pūrṇā] bhaviṣyati arhatkaṭikābhis tadā upaguptaḥ parinirvāsyati/ parinirvṛtaṃ cainaṃ tābhir eva arhatkaṭikābhiḥ sametya te dharmāpayīṣyanti/「〔かの洞窟が、阿羅漢達の箸 (Skt. kaṭikā; Tib. thurma) でもって満杯に〕なる時、その時、ウパグプタは般涅槃するであろう。そして、般涅槃した彼を、それら阿羅漢達の箸を集めて、彼ら (=阿羅漢達)は茶毘に付すであろう。」(p. 4.9-11)という文章が見られる。Tib. (P. 113a7-8; D. 123a4-5)も『薬事』(p. 42a2-4)もこれに一致する。

「これは、ルルムンダ⁽¹²⁾という名の山である。そこにおいて、如来の般涅槃の百年後、シャーナカヴァーシンという名の比丘が居るであろう。かの者は、かのルルムンダ山において精舎を建立するであろう。そして、ウバグプタを出家させるであろう。アーナンダよ、マトウラーにおいて、ナタとパタという兄弟である二人の商人があらう。彼ら二人が、ルルムンダ山に精舎を建立するであろう。そこ(=精舎)は、ナタバティカ(naṭabhaṭika)という名とならう。アーナンダよ、瞑想に適する諸の私の臥座処の内以最勝の場所こそ、このナタバティカという阿蘭若処⁽¹³⁾である。」

そこで、アーナンダ具寿は、世尊に以下の様に言った。

「大徳よ、ウバグプタ具寿がその様に多くの人々に対して利益を行うことは、素晴らしいことです。」〔と。〕

世尊は言った⁽¹⁴⁾。

「アーナンダよ、現在だけではないのだ。同様に過去時においても、彼(=ウバグプタ)により〔悪道に〕落下した身体によっても⁽¹⁵⁾、他ならぬあの場所で〔多くの人々の利益が行われたのだ〕。

(12)原文は *rurumuṇḍa* (Divy(V). p. 216.20; Divy(CN). p. 349.8) となっている。『王伝』では「優留慢荼山」(p. 111c7)、また、『王経』では「優樓漫陀」(p. 149c5)と音訳され、また、それらの音訳語が後に記される *urumuṇḍa* (Divy(V). p. 216.27; Divy(CN). p. 349.19, 他) という名の山にも充当されていることから、ここに出てくる *rurumuṇḍa* という山と後に出てくる *urumuṇḍa* とは同一の山であることがわかる。しかし、ここでは、原文に従い「ルルムンダ」とする。

(13)「阿蘭若」(*aranya*) については、佐々木閑氏の以下の研究に詳しい。佐々木閑『出家とはなにか』東京：大蔵出版、1999年、pp. 108-109.

(14)以下のウバグプタの過去世物語についてのブッダの解説は、アーナンダによるウバグプタへの賞讃によって導かれているが、MSV では、アーナンダによるウバグプタの賞讃は無く、ウバグプタに対する未来授記に疑問を生じた比丘達がブッダにその解説を求め、これに答えてブッダがウバグプタの過去世物語を語ることになっている (MSV. p. 4.12-14; P. 113a8-113b1; D. 123a5-6)。『薬事』(p. 42a4-7)も同様である。

(15)原文は... *atīte 'py adhvani tena vinipatitaśarīreṇāpy* (Divy(V). p. 26-27; Divy(CN). p. 349.18) である。『王伝』は「乃於往昔無量劫時亦多所利益。」(p. 111c14) とするのみであるが、『王経』では「過去久遠其生惡道已益多人。」とあり、悪道に生じて尚、多くの人々に益をなしたという文章が見られる。『王経』における「悪道」とは、後に語られるエピソードにおいて、ウバグプタが過去世に猿という境涯を得たことを指すと考えられる。『賢愚経』の「優波鞠提品第六十」(大正 4, pp. 442b12-443c24) には、Divy. におけるウバグプタの物語と部分的に一致する話が存在し、そこにおいてウバグプタは、自らが猿としての境涯を得た理由について語っている (p. 443c15-21)。その物語において、ウバグプタが過去世において若い修行者であった時、或る阿羅漢の素早い動きを見て「猿に似ている」と言ったために五百の生涯で猿として生まれたと自ら説明し、妄言をなすべきでないとして戒めている。

ウルムンダ山⁽¹⁶⁾には三つの斜面があった。或る区域には、五百人の辟支仏達が住んでいた。二つ目〔の区域〕には、五百人の苦行者達が〔住んでいた〕。三つ目〔の区域〕には、五百匹の猿達が〔住んでいた〕。そこには、五百匹の猿達の群れの長たる者が〔居り〕、彼は、かの群れを捨てて五百人の辟支仏達が住んでいる斜面へと去った⁽¹⁷⁾。〔そして、〕かの辟支仏達を見たので、彼（＝猿）には浄心⁽¹⁸⁾が生じた。彼は、かの辟支仏達に対して、落ち葉・根・果実を献じた。また、彼ら（＝辟支仏達）が結跏趺坐している時、彼は最年長の者に対して礼拝をして後、最も新参である者のところまで行って後、結跏趺坐した。やがて、かの辟支仏達は般涅槃した⁽¹⁹⁾。< 217 > 彼（＝猿）は、彼ら（＝辟支仏達）に対して [350] 落ち葉・根・果実を献じた。〔しかし〕彼らは受けとらなかった。彼（＝猿）は、彼ら（＝辟支仏達）の衣服の裾を引っ張り両足を掴んだりした。〔しかし、彼らは動かなかった〕⁽²⁰⁾。そこで、かの猿は考えた。

< この方々は、きっと死んでしまったのであろう。 >⁽²¹⁾ [と。]

⁽¹⁶⁾原文は *urumuṇḍa* (Divy(CN). p. 349.19; Divy(V). p. 216.27) である。既に指摘した通り、ここでは既出の山 *rurumuṇḍa* が *urumuṇḍa* と記されているが、これらの名称は同じ山を指していると考えられる。原文に従いここでは「ウルムンダ」とする。

⁽¹⁷⁾MSV では、猿の群れの長が群れから離れた理由について、以下の様な内容を記している。猿の群れの長は子が生まれる度にその子を殺していたが、或る雌猿が雄猿を妊娠した。生まれたその雄猿は雌猿達に護られて密かに養育され、その雄猿が大人になった時、以前から子を殺していた猿の群れの長は、大人になった雄猿によって群れから追放された。そうして、ウルムンダ山の中を彷徨っていた時、辟支仏達の声を聞き、彼らのもとに赴いた (MSV. p. 4.17-5.13; P. 113b3-6; D. 123a7-b4)。『薬事』(p. 42a11-20) も同様。

⁽¹⁸⁾原文では *prasādo jātaḥ* (Divy(V). p. 216.30; Divy(CN). p. 349.24) である。漢訳は『王伝』(p. 111c19)、『王経』(p. 149c15) とともに「生歡喜心」とし、*prasāda* を「歡喜心」と解釈する。

⁽¹⁹⁾MSV では、辟支仏達が涅槃する場面がより詳細に記されている。*yāvad apareṇa samayena teṣāṃ pratyekabuddhānām etad abhavat/ yad asmābhir anena kvāthakāyena prāptavyam/ prāptaṃ tad yannu vayaṃ śāntaṃ nirvāṇadhātuṃ praviśema iti/ tatas te jvalanatapanavaṣaṇavidyotanaprātihāryāṇi kṛtvā nirupadhiśeṣe nirvāṇadhātau parinirvṛtāḥ/* 「さて、ある時、かの辟支仏達は以下の様に考えた。『我々が、この衰れな身体によって得るべきもの、それは〔既に〕得られた。今や、我々は寂靜なる涅槃界に入るべきである。』と。それから彼らは、炎と熱と降雨と雷光〔を伴う〕神変を造作して、無余依涅槃界に般涅槃した。」(MSV. p. 5.16-20; P. 113b8-114a2; D. 123b5-7; 『薬事』 p. 42a23-26)。

⁽²⁰⁾『王伝』での「亦不動搖」(p. 111c23)、『王経』での「縁覺不動。」(p. 149c21) という記述により補足。

⁽²¹⁾MSV では、猿は辟支仏達が死んだことを了解していない。MSV において、辟支仏達が暮らしていた洞窟を住処とする神は、猿が辟支仏達の衣を揺さぶるのを止めさせるため、大きな岩で洞窟の入り口を塞

それから、その猿は悲しんで後、二つ目の区域に行った。そこには、五百人の苦行者達が住んでいた。また、かの苦行者達の内、或る者達は棘を寝床としていた。或る者達は灰を寝床としていた。或る者達は手を挙げていた。或る者達は、五熱⁽²²⁾に住していた。

彼(=猿)は、彼ら(=苦行者達)の各々の立ち居振る舞いを妨害し始めた。棘を寝床とする者達に対しては、棘を取り去った。灰を寝床とする者達に対しては、灰を掃き散らした。手を挙げていた者達に対しては、手を下に降ろさせた。五熱に住していた者達に対しては、火を消した。そして、それら〔の行為〕によって、〔苦行者達の〕立ち居振る舞いが妨害された時、その時、彼(=猿)は、彼ら(=苦行者達)の前で結跏〔跏坐〕した。そこで、かの苦行者達は〔そのことを〕師匠に報告した⁽²³⁾。すると、彼(=師匠)によっても〔以下の様に〕言われた。

『先ず〔お前達は〕結跏跏坐せよ。』⁽²⁴⁾〔と。〕

く。猿は辟支仏達に会えないことを嘆き悲しみ、そこから立ち去ると、聞きなじんだ人間の言葉を求めて山中を彷徨った、という内容になっている。(MSV. p. 6.3-8; P. 114a2-4; D. 123b7-124a2; 『薬事』 p. 42a28-b4)

⁽²²⁾日中に、周囲四箇所に火を置き、その中心に坐す。五つめの火は日中の太陽熱である。例えば *Manusmṛti* の第6章第23偈 (*Manusmṛti with the Manubhāṣya of Medhātithi*, ed by Ganganath Jha, vol. 1, Delhi: Motilal Banarsidass, 1999, p. 503.22-23) には, grīṣme pañcatapāstu syād varṣāsv abhrāvakaśīkaḥ// ārdravāsāstu hemante kramaśo vardhayamstapaḥ//23// 「また、暑い季節には五熱〔の苦行〕が、諸の雨期には、露天を宿とすべきである。また、寒冷な季節には、濡れた服が〔あるべきである〕。段階的に苦行を増大させつつ。」と記され五熱の苦行に言及されている。また、時代はかなり遅れるが Medhātithi の *Manubhāṣya* によれば, pañcabhir ātmānaṃ tāpayet/ catusṣu dikṣu agnīnt sannidhāmpya madhye tiṣṭhed upariṣṭād ādityatāpaṃ sevet/ 「五〔熱〕によって、自らを焼くべし。四方において諸の火を置いて後、中央に位置すべし。上方からは、太陽の熱に従うべし。」とされ、五熱の苦行の詳細が語られている (Jha, *ibid.*, p. 503.24-25)。

⁽²³⁾原文には yāvat tair ṛṣibhir ācāryāya niveditam (Divy(V). p. 217.8; Divy(CN). p. 350.11-12) とされ、苦行者達が ācārya 「師匠」に猿のことを報告したことが記されているが、『王伝』では「五百仙人各作是言。彌猴今怪我等所作。我等試學彌猴所作。」(pp. 111c29-112a1) と記され、ācārya 「師匠」にあたる人物は存在せず、苦行者達が互いに猿の所作を試しに学んでみようと言い合ったとされる。また、『王経』では「是彌猴四威儀中常教化諸仙。既教化已。於諸仙前端坐修定。語仙人言。汝等一切當如是坐。」(p. 149c28-29) とされ、猿自らが苦行者達に坐すように促したとされ、伝承が異なっている。

⁽²⁴⁾MSV では、苦行者達の師匠によるこの指示の直前に bhavantaḥ smṛtimanto hy ete śākhāmṛgā bhavanti/ nūnam anena īryāpathena ke ṛṣayo 'nena drṣṭā bhaviṣyanti/ 「あなた方よ、実に、この猿達は記憶を有しているのだ。間違いなく〔猿が行っている〕この立ち居振る舞いを伴った何れかの苦行者達が、この〔猿〕によって見られたのだろう。」(MSV. p. 6.19-7.1; P. 114b1-2; D. 124a7; 『薬事』 p.

そこで、かの五百人の苦行者達は結跏趺坐した。⁽²⁵⁾〔すると〕彼らは、師匠無く教授者無くして、三十七菩提分法⁽²⁶⁾を理解した後、辟支菩提を証得した。

さて、かの辟支仏〔となった苦行者〕達は、以下の様に考えた。

<私達によってより良き〔境地〕が得られたのは、全てこの猿に出会ったからである。
>〔と。〕

そこで、彼らによって、かの猿は果実と根でもって扶養された。そして〔猿が〕死ぬと〔彼らは〕その〔猿の〕身体を諸の香木でもって焼いた。

アーナンダよ、そのことを〔お前は〕どう思うか。五百匹の猿の群れの長であった者、かの者はウパグプタなのだ。その時にも、彼（＝ウパグプタ）により〔悪道に〕落下した身体によっても、他ならぬあのウルムンダ山において、多くの人々に対して利益が行われたのだ。未来時においても、私の般涅槃の百年後、他ならぬあのウルムンダ山において、多くの人々に対する利益を行うであろう。〕〔と。〕

また、そのこと（＝ブッダの般涅槃の百年後、ウパグプタによって多くの人々に対する利益がなされること）が、以上と同様であることを私達は明らかに致しましょう。

娼婦への教化

シャーナカヴァーシン上座によって、ウルムンダ山に精舎が建立された時〔シャーナカヴァーシンは以下の様に〕精神を集中した。

<あの〔ブッダによって予言されたグプタという名の〕香商は生まれたのだろうか、それとも未だ生まれていないのだろうか。>と。

<〔香商は〕生まれている。>〔と、彼は〕知った。

さて、彼（＝シャーナカヴァーシン）は〔以下の様に〕精神を集中した。

<彼（＝香商）の息子である者〔すなわち、ブッダによって〕『私の般涅槃の百年後、ブッダの責務を果たすであろう』と指摘された無相のブッダであるウパグプタという名の者、あの者は既に生まれたのだろうか〔351〕未だ生まれていないのだろうか。>

42b15-16) という文章が存在する。ここで、śākhāmṛgāḥ (Tib. spre'u de dag)「猿達」と複数になっていることが問題となるが、Tib. でも同様に複数となっているので容易に解決できない。

⁽²⁵⁾MSV ではこの位置に teṣāṃ pūrvakāni kuśalamūlāny āmukhībhūtāni/「彼らに過去世の善根が顕現した。」(p. 7.2-3; P. 114b2-3; D. 124a7-b1; 『薬事』p. 42b17-18) という文が介在する。すなわち、MSV では、辟支菩提の獲得が、結跏趺坐したことやそれに伴う瞑想という行為のみによって得られたのではなく、苦行者達の過去世の善根が関わっていることになる。

⁽²⁶⁾『王伝』のみが「七覺意法自然在前。即得辟支佛。」(p. 112a3)とし、Divy. 及び『王経』(p. 150a2)の記す三十七菩提分法とは異なる。

〔と〕。

<未だ生まれていない。>と〔彼は〕知った⁽²⁷⁾。

さて、彼(=シャーナカヴァーシン)による方便でもって、香商グプタは世尊の教えに対して〔心を〕浄らかにした。彼(=グプタ)が〔心を〕浄らかにした時、その時、上座は多くの比丘達とともに、或る日、彼(=グプタ)の家にやって来た。別の日には、自身ともう一人の者⁽²⁸⁾とで〔やって来た〕。また別の日には、独りきりで〔やって来た〕。さて、香商グプタはシャーナカヴァーシン上座が独りきりであるのを見たので尋ねた。

「今、聖者には、随従する沙門⁽²⁹⁾が誰もいないのですか。」〔と。〕

上座は答えた。

「何故、年老いた私達に随従する沙門がいようか。もし、信に導かれて出家する者達がいるならば⁽³⁰⁾、その者達が我々に随従する沙門となる。」〔と。〕

香商グプタは言った。

「聖者よ、先ず、私は家に居住することに執着しており、また、感官の対象に対して喜んでおります。私は出家することができません。しかし、私達に息子が生まれたならば、私達はその者を聖者に随従する沙門として与えることに致しましょう。」〔と〕。上座は言った。

「愛しき者よ、その様にせよ。しかし、お前は結んだ約束を憶えておくように。」〔と〕。

さて、香商グプタには息子が生まれ、彼に対してアシュヴァグプタという命名がなされた。彼(=アシュヴァグプタ)が成長した時、シャーナカヴァーシン上座は香商グプタに会って〔以下のように〕言った。

「愛しき者よ、お前は『私達に息子が生まれたならば、私達はその者を聖者に随従する沙門として与えましょう。』と約束した。〔お前は息子の出家を〕許諾せよ。私は〔お

⁽²⁷⁾原文は paśyaty adyāpi notpadyate (Divy(CN). p. 351.1) である。この文章は Divy(CN). には存在するが、Divy(V). には欠落している。また、この文は『王伝』では、「復觀鞠提彼子生未。猶未生子。」(p. 117b26)と記載があり、また『王経』でも「生已未生。見其未生。」(p. 157b9)と記載がある。従って、Divy(CN). により補足して訳す。

⁽²⁸⁾原文は ātmadvītīyaḥ (Divy(V). p. 217.22; Divy(CN). p. 351.4) である。『王伝』は「以漸將少乃至...」(p. 117b28)とし、特に dvītīya の語を訳出しない。『王経』は「別日與一弟子入其家。」(p. 157b13)とし、dvītīya を「弟子」と解して訳す。

⁽²⁹⁾原文は paścācchramaṇo (Divy(V). p. 217.24; Divy(CN). p. 351.8) である。

⁽³⁰⁾原文では yadi kecit śraddhāpurogena pravrajanti (Divy(V). p. 217.25; Divy(CN). p. 351.8) である。『王伝』は「若信樂出家者...」(p. 117c2)とし、『王経』は「若有人樂精進出家...」(p. 157b17)とする。

前の息子を)出家させよう。」と。

香商は言った。

「聖者よ、この者は私達の一人息子なのです。ご容赦下さい。私達に〔この子と〕別の二番目の息子が生まれたならば⁽³¹⁾、私達はその者を聖者に随従する沙門として与えましょう。」

そこで、< 218 > シャーナカヴァーシン上座は〔以下の様に〕精神を集中した。

< この者はかのウパグプタであろうか。 > 〔と。〕

< そうではない。 > 〔と、彼は〕知った。

〔そこで〕かの上座は告げた。

「その様にせよ。」と。

さて、彼 (= グプタ) には二番目の息子が生まれた。その者に対してダナグプタという名が付けられた。また、彼 (= ダナグプタ) が成長した時、その時、シャーナカヴァーシン上座は香商グプタに言った。

「愛しき者よ、お前は『私達に息子が生まれたならば、私達はその者を聖者に随従する沙門として与えましょう。』〔と〕約束した。そして、お前にこの息子が生まれた。〔お前は息子の出家を〕許諾せよ。私は〔お前の息子を〕出家させよう。」と。

香商〔グプタ〕は言った。

「聖者よ、ご容赦下さい。一人〔目の息子〕は私達の商品を収集するでしょうし⁽³²⁾、二番目〔の息子〕は家内で〔それらを〕守護するでしょう。」と⁽³³⁾。

〔グプタは続けて言った。〕

「しかし、私達に三番目の息子が生まれたならば、その者を聖者に与えます。」〔と〕。

そこで、シャーナカヴァーシン上座は〔以下の様に〕精神を集中した。

< この者は、かのウパグプタであろうか。 > 〔と〕。

⁽³¹⁾ Divy(V). は *marṣaya naḥ/ yo 'smākaṃ dvitīyaḥ putro bhaviṣyati, ...* 「私達をご容赦下さい。私達に二番目の息子が生まれたら、...」(p. 217.31-32) とするが、Divy(CN). は *marṣayānyo yo 'smākaṃ dvitīyaḥ putro bhaviṣyati ...* 「ご容赦下さい。私達に〔この子と〕別の二番目の息子が生まれたら、...」(p. 351.18-19) とする。naḥ 「私達を...」とするか anyo 「別の...」とするかという点について、『王経』(p. 157b23) はこれらの語についての相当語を見出せないが、『王伝』(p. 117c7) に「若更有子當與。」(p. 117c7) として「更」という語が見られる。この語は *dvitīyaḥ* の訳語と考えられるが、anyo を訳した可能性も否定できないので、ここでは、Divy(CN). の読みに従う。

⁽³²⁾ 原文は *saṃśayīṣyati* (Divy(V). p. 218.6; Divy(CN). p. 351.28) であるが、文脈に合致しない。Divy(CN). の note 中の指摘に従い *saṃcayīṣyati* 「収集するであろう」(p. 351, note 3.) に訂正して訳す。

⁽³³⁾ Mukh. には、この“ *iti* ”の語を欠く写本があることが指摘されている (p. 6, note 18)。

[352] <そうではない。>と〔彼は〕知った。

それから、上座は言った。

「その様にせよ。」と。

さて、香商グブタに三番目の息子が生まれた。〔その息子は〕容貌が勝れ、見目麗しく、穏やかで、傑出しており、人間的な美しさにとどまらず、神々の様な美しさを有していた。彼（＝三番目の息子）に対して、様々に、誕生に対する誕生祭が行われた後で、ウバグブタという名が付けられた。彼（＝ウバグブタ）が成長した時にも、また、シャーナカヴァーシン上座は香商グブタに会って、〔以下の様に〕言った。

「愛しき者よ、お前は『私達に三番目の息子が生まれたならば、私達は〔その者を〕聖者に随従する沙門という目的において与えましょう。』〔と〕約束した。〔今、〕お前にこの三番目の息子が生まれた。〔お前は息子の出家を〕許諾せよ。私は〔お前の息子を〕出家させよう。」と。

香商グブタは言った。

「聖者よ、約束として、『〔商売において〕収益もなく⁽³⁴⁾、損失もなくなる』と〔言われる〕場合に、その場合に、私は〔三番目の息子を与えることを〕許諾致しましょう。』〔と〕。

彼（＝グブタ）によって約束がなされた時、その時、マーラによって、マトウラー全体が〔嫌な〕匂いで満たされた⁽³⁵⁾。彼ら（＝マトウラーの住人）は皆、ウバグブタの

⁽³⁴⁾Divy(V). では、*yadā lābho 'nucchedo bhaviṣyatīti* という読みを採用し「〔商売において〕収益が失われなくなる、と〔言われる〕場合」(p. 218.13-14)とするが、Divy(CN). では、*yadālābho 'nucchedo bhaviṣyatīti* 「〔商売において〕収益もなく損失もない、と〔言われる〕場合」(p. 352.9)となっている。この二つの異なる読みについては、後に、香商グブタがシャーナカヴァーシンに、*ārya, eṣa samayaḥ/ yadā na lābho na chedo bhaviṣyati, tadānujñāsyāmīti* 「聖者よ、以下の様な約束が〔ございました〕。『〔商売において〕収益もなく損失もない場合に、その場合に私は許諾致しましょう。』と。」(Divy(V). p. 221.30-31; Divy(CN). p. 356.8-9)と語る文章が存在する。従って、ここでの二つの読みの内、*yadālābho ...* が後の文脈と合致する。従って、Divy(CN). の *yadālābho* とする読みを採用する。『王経』も「若長若退不得出家。不長不退乃聽出家。」(p. 157c9)として、*yadālābho* という読みを指示する。しかし、『王伝』は「若不斷我利便與尊者度令出家」(p. 117c18)として、*yadā lābho* という読みをもとにしているようである。

⁽³⁵⁾ここで、マーラが何故この様な行為を行ったのが問題である。先ず、『王伝』では「當爾之時魔王遍告摩突羅國。可詣鞠多市買。因魔告故遂多人市極大得利。」(p. 117c19-20)、『王経』では「是時魔王令摩偷羅國一切人衆悉買其物令其得利。」(p. 157c10)となっており、共にマーラがグブタの店から香を買う様に促し収益を上げさせた、という記述がある。従って、マーラはグブタに収益を得させるために〔嫌な〕匂いを振りまいたのだと考えることができ、更に、匂いが振りまかれたのが、Divy. の *yadā tena samayaḥ kṛtaḥ, tadā māreṇa sarvāvātī mathurā gandhāviṣṭā* 「彼（＝グブタ）によって約束がなされた時、その時、マーラによって、マトウラー全体が〔嫌な〕匂いで満たされた。」(Divy(V). p. 14-15; Divy(CN). p.

もとから諸の香を購入した。

〔シャーナカヴァーシンは考えた。〕

<彼 (= マーラ) は多く〔の取引における利益〕を〔ウパグプタに〕与えるであろう。

>〔と。〕

そこで、シャーナカヴァーシン上座はウパグプタのもとに行った。

ウパグプタは香の市場にいた。彼は法によって取引を行い、諸の香を売った。

シャーナカヴァーシン上座は彼に告げた。

「愛しき者よ、お前にはどの様な心・心所が起こっているか。汚れているか、それとも、汚れていないか。」と。

ウパグプタは答えた。

「聖者よ、汚れた心・心所はどの様なものか〔そして〕汚れなき〔心・心所は〕どの様なものか〔私は〕全く知りません。」と。

シャーナカヴァーシン上座は言った。

「愛しき者よ、もし〔お前が〕純一なる心 (= 汚れなき心) を理解することができないのなら⁽³⁶⁾、反対のもの (= 汚れた心) を離れること〔もできないであろう〕。」「と。〕
彼 (= シャーナカヴァーシン) は、彼 (= ウパグプタ) に対して、黒い布と白い布とを与えた。

「もし、汚れた心が起こったなら黒い布を置け。また、汚れなき心が起こったなら白い布を置け。浄らかなことを思惟せよ⁽³⁷⁾。そして、ブッダに対する憶念を实践せよ。」

352.10-11) という文章から判る通り、グプタとシャーナカヴァーシンが約束を結んだ時である。このような状況を考え併せると、二人が結んだ「〔商売において〕収益もなく損失もない場合に、出家を許す」という条件を成立させないようにするため、すなわち、ウパグプタを出家させないようにするために、マーラがこの様なことを行ったということが考えられる。

⁽³⁶⁾原文は *yadi kevalam cittam parijñātuṃ na śakyasi ...* (Divy(V). p. 218.20; Divy(CN). p. 352.17-18) である。Mukh. はこの文章の中の *na* を欠く写本が一つあり、また、漢訳もこの *na* を欠くことを理由に *na* を削除する (p. 8.2-3, note 2)。しかし、Divy(V). と Divy(CN). とがもとにした写本に従い、ここでは *na* を削除せず訳す。

⁽³⁷⁾Divy(V). と Divy(CN). はともに *śubhāṃ manasi kuru* 「浄らかなことを思惟せよ」(Divy(V). p. 218.22; Divy(CN). p. 352.21) であるが、Mukh. は不明瞭ながら *aśubhāṃ* と読みうる写本があることを指摘し、*aśubhāṃ manasi kuru* 「不浄を思惟せよ」(p. 8.5-6) という読みを採用する。漢訳の対応箇所では、『王伝』(p. 117c28) も『王経』(p. 157c22-23) も「念佛」と「不浄観」の語が存在するので、二つの漢訳は Mukh. の読みを支持していると考えられる。Mukh. の読みは漢訳から見て有力であるが、判読が困難とされる写本に基づく点を考慮し、ここでは、Divy(V). と Divy(CN). に従い、*śubhāṃ* という読みを採用する。

と。

〔以上の様に、〕彼（＝シャーナカヴァーシ）はこの者（＝ウパグプタ）に指示した。

さて、彼（＝ウパグプタ）に汚れなき諸の心・心所が生じ始めた。〔最初、〕彼は黒い〔布〕を二つ、白い〔布〕を一つ置いた⁽³⁸⁾。また〔後には、〕黒い〔布〕を半分、白い〔布〕を半分置いた。また〔更に後には、〕白い〔布〕を二切れ、黒い〔布〕を一〔切れ〕置いた。さて、次第に、白一色の心のみが生じた。彼は白い布のみを置いた。〔彼は〕法によって取引を行った。

〔さて、〕マトゥラーにヴァーサヴァダッターという名の娼婦がいた。彼女の下女はウパグプタのもとに行き、諸の香を購入した。すると、彼女（＝下女）は⁽³⁹⁾〔353〕ヴァーサヴァダッターに〔以下の様に〕言われた。

「少女よ、お前はかの香商から〔香を〕盗んだのでしょう。〔お前が〕持ち帰った諸の香は多い〔のですから〕。」と。

少女は答えた。

「お嬢様、香商の息子ウパグプタは美貌を具え、〔言葉についての⁽⁴⁰⁾〕比類無き甘美さを具えており、法によって取引を行っているのです。」「と。〕

そして〔それを〕聞いたので、ヴァーサヴァダッターにはウパグプタに対して貪欲を伴う心が生じた。

そこで、彼女（＝ヴァーサヴァダッター）は〔以下の伝言を託して〕下女をウパグプタのもとに使いに出した。

「あなたのもとに私は訪れたい。あなたとともに喜びを感受することを私は望んでおります。」「と。〕

さて、下女は< 219 >ウパグプタに〔伝言を〕告げた。ウパグプタは〔伝言に答えて〕言った。

「姉妹よ、〔今は〕あなたが私と会う時ではない。」「と。

ヴァーサヴァダッターは五百プラーナ⁽⁴¹⁾〔という対価〕でもって奉仕していた。彼女

⁽³⁸⁾『王伝』は Divy. に一致するが、『王経』では、黒と白との比率が二対一になる前に、「… 而取多黒丸。乃至不得一白丸。」(p. 157c24-25) という記述があり、最初ウパグプタは黒色のものばかりを置き、白色のものを置くことがなかったとされる。

⁽³⁹⁾Divy(V). と Divy(CN). はともに so「彼は」(Divy(V). p. 218.29; Divy(CN). p. 352.29) とするが、文脈に合致しない。一方、Mukh. はこの語について s̄a という読みを採用する。『王伝』と『王経』は、この人称代名詞を訳さないが、ヴァーサヴァダッターが叱責する相手は文脈から下女と判断できるので、ここでは、Mukkh. に従い、s̄a「彼女は」(p. 8. 14) に訂正して訳す。

⁽⁴⁰⁾『王経』の「形色具足言語微妙。」(p. 158a2) という記述により補足。

⁽⁴¹⁾原語は purāṇa (Divy(V). p. 219.2; Divy(CN). p. 353.8) である。貨幣の単位。

には〔以下の様な〕考えが浮かんだ。

<〔ウパグブタは〕きっと〔私に〕五百プラーナを支払うことができないのだ。>〔と〕
そこで、彼女は〔以下の伝言を託して〕下女をウパグブタのもとに使いに出した。

「私には、あなたのもとから、一カールシャーパナ⁽⁴²⁾すらも求めるつもりはありません。あなたと喜びを感受したいだけなのです。」〔と。〕

下女は、その通りに告げた。ウパグブタは〔伝言に答えて〕言った。

「姉妹よ〔今は〕あなたが私と会う時ではない。」と。

さて、或る商業組合長の息子がヴァーサヴァダッターのもとにやって来た。また、或る隊商主が、北方の国⁽⁴³⁾から、取引で得た五百頭の馬を引き連れて、マトウラーに到着した。彼(=隊商主)は告げた。

「すべての〔娼婦の〕中で最も素晴らしい娼婦は誰なのか。」〔と。〕

彼(=隊商主)は〔以下の様に〕聞いた。

「ヴァーサヴァダッターである。」と。

彼(=隊商主)は五百プラーナとたくさんの贈り物とを携えてヴァーサヴァダッターのもとにやって来た。すると、強欲に眼がくらんだヴァーサヴァダッターはかの商業組合長の息子を殺害し、物置に放り込むと、隊商主と喜びを享受した。

さて、かの商業組合長の息子〔の死体〕は〔彼の〕親族達によって物置から取り出され、王に〔そのことが〕告げられた。それから、王は告げた。

「お前達は行け⁽⁴⁴⁾。両方の手足と耳と鼻とを切り落として後、ヴァーサヴァダッターを死体置き場⁽⁴⁵⁾に捨てよ。」〔と。〕

そこで、彼らは両方の手足と耳と鼻とを切り落として後、ヴァーサヴァダッターを死体置き場に捨てた。

さて、ウパグブタは〔以下の様に〕聞いた。

「両方の手足と耳と鼻とを切り落とされて後、ヴァーサヴァダッターは死体置き場に

⁽⁴²⁾原語は *kārṣāpaṇa* (Divy(V). p. 219.3; Divy(CN). p. 353.11) である。貨幣の単位。

⁽⁴³⁾原文は *uttarāpathāt* (Divy(V). p. 219.6; Divy(CN). p. 353.14-15) である。『王伝』では「北方」(p. 118a11)、『王経』では「從北天竺來。」(p. 158a12) と記されている。

⁽⁴⁴⁾原文は *gacchantu bhavantaḥ* (Divy(V). p. 219.10; Divy(CN). p. 353.21-22) である。『王伝』(p. 118a19) も『王経』(p. 158a19-20) も誰に対して命じたのか明確ではない。Strong氏は、"the king ordered his men ..." (Strong, *ibid.*, p. 180) と「家来達」という語を補足して訳す。しかし、この王の命令の直前に複数形で登場するのは「親族達 (*bandhubhir*)」(Divy(V). p. 219.9; Divy(CN). p. 353.20) のみであり、事の次第を王に訴えた親族達に対して命じたとも考えられる。

⁽⁴⁵⁾原語は *śmaśāna* (Divy(V). p. 219.11; Divy(CN). p. 353.22) である。『王伝』では「塚間」(p. 118a19)、『王経』では「野外」(p. 158a20) と訳されている。

捨てられた。」「と。

彼には〔以下の様な〕考えが浮かんだ。

<以前、彼女は私に対して〔美貌と声という〕感官の対象を原因とする会見を求めた⁽⁴⁶⁾。しかし、今、彼女の両方の手足と耳と鼻とが切除された。そして、今こそ、彼女と会見するための適時である。>と。

また〔ウバグプタは〕言った。

「〔この女性が〕美しい衣で四肢を覆い、種々の装飾品で飾られていた時、その時、解脱を求め生存に顔を背ける者達にとって〔354〕この女性と会うことは好ましいことではなからう。//2//

しかし、今、この時が、彼女と会見するための適時である。傲慢と貪欲と喜びとが消え失せ、鋭利な刃物でもって傷付けられた〔彼女の〕本性と結びついた姿を〔見るための適時である〕。//3//」〔と。〕

さて、侍者である一人の少年により傘蓋が保持され〔ウバグプタは〕穏やかな振る舞いでもって、死体置き場に到着した。一方、彼女の使者〔であった下女〕は〔ヴァーサヴァダッターの〕過去の〔良き〕属性に対する愛情の故に⁽⁴⁷⁾側に留まって、カラス等を追い払っていた。そして、彼女はヴァーサヴァダッターに告げた。

「お嬢様〔かつて〕あなたが私を何度も使いに出した、かのウバグプタがやって来ました。きっと、彼は欲望の貪りにさいなまれてやって来たのでしょう。」「と。

そして〔それを〕聞いたので、ヴァーサヴァダッターは言った。

「輝きは失せ、苦にさいなまれ〔血の〕赤色と黄褐色を有して、地において〔伏せた〕私を見て、彼にとって欲望の貪りがどうして起ころうか。//4//」〔と。〕

それから〔ヴァーサヴァダッターは〕使者〔であった下女〕に言った。

「私の身体から切除された両方の手足と耳と鼻、それらを〔お前は〕集めるのです。」と。

⁽⁴⁶⁾原文は *pūrvam tayā mama viṣayanimittaṃ darśanam ākāṅkṣitam* (Divy(V). p. 219.13; Divy(CN). p. 353.26-27) となっている。『王伝』では「彼女本以色聲欲樂因縁喚我。」(p. 118a21) とされ、*viṣayanimitta* 「感官の対象を原因とする…」にあたる語として「以色聲欲樂因縁」が見いだされ、具体的に「色(容貌)」と「声」が補われている。『王経』では「我於本時不樂見之共受五欲。」(p. 158a23) とされ、「五欲」という語でもって置き換えられている。

⁽⁴⁷⁾原文では *tasyās ca preṣikā pūrvaguṇānurāgāt* (Divy(V). p. 219.22; Divy(CN). p. 354.5-6) である。『王伝』では「婢以舊恩義故…」(p. 118a25)、『王経』では「其婢憶念其恩…」(p. 158b3) と記述されている。*anurāga* は「恩」として訳されており、ヴァーサヴァダッターに対する恩であると考えられる。

そこで、彼女は〔それらを〕集め、布で覆い隠した。一方、ウパグプタは到着した後、ヴァーサヴァダッターの前に立った。すると、ヴァーサヴァダッターは面前に立ったウパグプタを見て〔以下の様に〕言った。

「あなた、私の身体が本来の状態であり、感官の対象に関する喜びに適していた時、その時に、私はあなたに対して、何度も使者〔であった下女〕を遣りました。〔しかし、〕あなたは〔以下の様に〕告げました。 < 220 > 『姉妹よ〔今は〕あなたが私と会う時ではない。』と。〔しかし、〕今、私の両方の手足と耳と鼻とは切除され、他ならぬ自らの血にまみれた泥の中に〔私は〕居るのです。どうして、今、あなたはやって来たのですか。』〔と。〕

また〔ヴァーサヴァダッターは〕言った。

「蓮の内部の様な柔らかさを有し、非常に高価な衣と装飾品でもって飾られた、会見に適したこの身体を私が有していた時、その時に、私は不幸にも、あなたを目の当たりにしなかった。//5//

今日、私の身体が会見に適せず、戯れによる喜びと歓喜と感嘆は消え失せ、恐怖を作り出し、血と泥にまみれた時に、実に、あなたが〔私を⁽⁴⁸⁾〕見るためにやって来たのはどうしてか。//6//」〔と。〕

ウパグプタは答えた。

「姉妹よ、私は欲望にさいなまれて、お前の側にやって来たのではない。そうではなく、諸の不浄なる欲望の本性を見るために来たのである⁽⁴⁹⁾。//7//
情欲に適した種々の外面的な衣と装飾品等によって〔お前が〕覆われていた時には〔たとえ〕勤勉さを有する者達によって眺められつつあったとしても、その場合にも〔彼らによってお前が〕適切な在り方で見られることはないであろう。//8//
しかし、今、お前のこの容貌は見られるべきである。〔なぜなら〕偽りから離れ、本性に安住している〔から〕。この様な骸が本来であるものを喜ぶ者達、その者達は賢ならざる者達であり、そして、非難されるべき者達である。//9//
〔355〕皮によってつなぎ止められ、血にまみれ、皮膜に覆われ、肉の塊が張り付き、そして、あらゆるところに幾千の血管が取り巻いた身体に対して、ここから、誰が魅了されるであろうか。//10//

(48)Mukh. に存在する“ me ”「私を」(p. 11.17)の語によって補足。

(49)cd 句の原文は、kāmānām aśubhānām tu svabhāvaṃ draṣṭum āgataḥ (Divy(V). p. 220.13; Divy(CN). p. 354.25)である。『王伝』では「我欲知欲實相故來。」(p. 118b2)とし「不浄」の語がでない。『王経』では「為見貪欲想及不浄想。是故我來。」(p. 158b18)とあり、Divy. とよく一致する。

さらに、姉妹よ、

愚者は、外側の美しい諸の性質を見るので魅了される。賢者は、内側の汚れた〔諸の性質〕を知るので無関心である。//11//

実に、身体というものは、とりわけ不快なものであり不浄なものである。〔たとえ〕欲望を有していて〔も〕、浄を知る者にとっては、諸の欲望の抑制が清浄なことなのである。//12//

< 221 > 実に、この世間では、

不浄を無効にする多種の香によって、悪臭は覆い隠され、種々の衣等の装飾品によって、外面的には、醜さは封じ込められるであろう。汗と湿気と垢等も、不浄なものである〔が〕〔世人は〕それらを水でもって取り除く。以上の様にして、欲望を自体とする者達によって、この不浄なる骸骨は大切にされる。//13//

しかし、よき言葉を語る等覚者の言葉を聴聞し実践する者達、その者達は、賢者達により常に非難された疲労と憂いと苦を生み出す諸の欲望を捨て去って、欲望の原因から離脱した心を有して、閑静なる園林に去り〔実践されるべき〕道⁽⁵⁰⁾という船を抛り所にして、生存という大海の対岸に渡る。//14//〔と。〕

〔以上のウバグプタの言葉を〕聞いたので、ヴァーサヴァダッターは輪廻を厭い、そして、ブッダの〔良き〕属性に対する憶念により、心が謙虚になり〔以下の様に〕言った。

「以上のことはその通りである。賢者よ、すべて〔あなた〕が語った通りである。正直なあなたに出会ったことにより、ブッダの言葉を私は聞くこととなった。//15//」〔と。〕

さて、ウバグプタは順序通りの話⁽⁵¹⁾を行って、諸の真実 (= 四諦⁽⁵²⁾) を明示した。また、ウバグプタはヴァーサヴァダッターの身体についての本性を理解したので、欲界に対して嫌悪する状態に至った。自らの法の説示に伴う真実の洞察に基づき、彼は

(50) 『王伝』には「遊於八正路」(p. 118b9)とあり、ここから、「道」(mārga: Divy(V). p. 221.9; Divy(CN). p. 355.13)は、具体的には八正道を指すと考えられる。

(51) 原文は、anupūrvikāṃ kathāṃ (Divy(V). p. 221.13; Divy(CN). p. 355.17)である。『王経』では、「次第説法」(p. 158c14)と訳される。

(52) 『王伝』(p. 118b13)、『王経』(p. 158c14)では「四諦」の語が存在する。また、『王伝』は「優波鞠多即為説四諦法輪。苦諦如融鐵集諦如毒樹。滅諦斷癡愛八聖道為出要。又復苦者如毒如癰如瘡。生苦老苦病苦死苦愛別離苦怨憎會苦求不得苦五盛陰苦苦行苦壞苦。總而言之三界受生皆亦是苦。」(p. 118b13-17)として、ウバグプタによる説法の内容を詳細に示す。

不還果に〔到達し〕、一方、ヴァーサヴァダッターは預流果に到達した。それから、真実を知見したヴァーサヴァダッターはウパグプタに感謝しつつ〔以下の様に〕言った。

「あなたの威力により、実に、とても恐ろしく、多くの過失と結びついた破滅への道（＝悪道⁽⁵³⁾）は閉ざされた。素晴らしき福德を有する神々の世界という行き先が開かれ、そして、涅槃への道が私によって獲得された。//16//

さらに、この私はかの世尊・如来・阿羅漢・正等覺者に帰依します。そして、法と比丘サンガに〔帰依します〕。と。

〔更に、ヴァーサヴァダッターは〕言った。

「開いた〔ばかりの〕真新しい蓮の花の〔様に〕汚れを離れた美しい眼を有し、神と賢者と共に讃えられたる、かの勝者（＝ブッダ）に、この〔私〕は帰依します。また、貪欲を離れたサンガに〔帰依します〕⁽⁵⁴⁾。//17//」と。

さて、ウパグプタはヴァーサヴァダッターに法に則った話を開示してから〔356〕立ち去った。そして、ウパグプタが立ち去ってほどなくして、ヴァーサヴァダッターは死んで、神々の内に⁽⁵⁵⁾再生した。そして、神々はマトウラーにおいて宣告した。

「ヴァーサヴァダッターはウパグプタのもとで法の説示を聞いたので、諸の聖なる真実（＝四聖諦）を見て、神々の内に再生した。」と。

そして〔それを〕聞いたので、マトウラーに住する人々はヴァーサヴァダッターの身体を供養した。

さて、シャーナカヴァーシン上座は、香商グプタを訪ねて、〔以下の様に〕言った。

「〔お前は息子の出家を〕許諾せよ。〔私は〕ウパグプタを出家させよう。」と。

香商グプタは言った。

「聖者よ、以下の約束が〔ありました〕。〔すなわち〕『〔商売について〕収益もなく、

(53) 『王伝』(p. 118b20)、『王経』(158c19)では「悪道」の語が存在する。

(54) この偈の原文(Divy(V). p. 221.23-24; Divy(CN). p. 355.26-28)では、訳に見る通り「仏」と「僧」に対する帰依のみが語られ、「法」に対する帰依が語られない。『王伝』はこの偈を記述しないが、『王経』は、

我往歸依佛 兩足第一尊
佛眼若青蓮 天人中可貴
清淨離欲法 無上應真僧 (p. 158c21-23)

として、「法」に言及する。

(55) Divy (Divy(V). p. 221.26; Divy(CN). p. 356.1-2)と『王経』(158c26)は単に神々の世界に再生したことを語るのみであるが、『王伝』では具体的に「生切利天」(p. 118b22)と記されている。

損失もなき場合に⁽⁵⁶⁾、その場合に〔私は息子の出家を〕許諾を致しましょう。』と。そこで、シャーナカヴァーシン上座は神通でもって、< 222 >〔商売について〕収益もなく、損失もなきよう造作した。それから、香商グプタは数え、比較し、測定させ、〔以下の様に〕知った。

< 収益もなく、損失もない。 >⁽⁵⁷⁾〔と。〕

それから、シャーナカヴァーシン上座は香商グプタに言った。

「実に、世尊・ブッダによって、この者は〔以下の様に〕指摘されたのだ。『私の般涅槃の百年後、ブッダの責務を果たすであろう。』と。〔それ故、お前は〕許諾せよ。〔私は彼を〕出家させよう。」と。

そこで、香商グプタは〔ウバグプタの出家を〕許諾した。

マーラへの教化

それから、シャーナカヴァーシン上座はウバグプタをナタバティカという阿蘭若処に導き、そして、受戒させた。また、白四羯磨が完了した⁽⁵⁸⁾。そして、ウバグプタはあらゆる煩惱を捨て去って後、阿羅漢果を証得した。それから、シャーナカヴァーシン上座は〔以下の様に〕告げた。

「愛しき者、ウバグプタよ、お前は世尊によって、『私の般涅槃の百年後、無相のブッダであるウバグプタという名の比丘が居るであろう。その者は、私の般涅槃の百年後、ブッダの責務を果たすであろう。』と指摘された。〔また、世尊によって〕『アーナンダよ、私の教誡者としての声聞達の内の最勝者は、実にこのウバグプタという比丘なのだ。』と〔指摘された〕。今、愛しき者よ、〔お前は〕教えに益することを行え⁽⁵⁹⁾。」

⁽⁵⁶⁾原文は *yadā na lābho na cchedo bhaviṣyati* (Divy(V). p. 221.30-31; Divy(CN). p. 8-9) である。この文章に基づき、既出のグプタがシャーナカヴァーシンに条件を出す箇所において、問題を指摘した二つの読み、すなわち *yadālābho* と *yadā lābho* との内、*yadālābho* を採用することにした。『王経』もここで「令其治生不利不銳。乃聽出家」(158c29-159a1)として、「家業の運営についての獲得も断絶もなくなるようにすれば、出家を許諾する」という条件を記している。しかし、ここにおいても『王伝』のみは「使我得利不絶當令出家」(p. 118b27)として、収益の獲得が無くなることはないようにすれば出家を許諾する、という内容となっている。

⁽⁵⁷⁾『王伝』には「鞠提日日稱量得利不絶故不欲放。」(118b29)とあり、収益の獲得が絶えることがなかったためにグプタはウバグプタを手放そうとしなかった、という文が存在している。

⁽⁵⁸⁾原文は *jñāpticatūrtham ca karma vyavasitam* (Divy(V). p. 222.5; Divy(CN). p. 356.16) である。

⁽⁵⁹⁾原文は *śāsanahitaṃ kuruṣva* (Divy(V). p. 222.9; Divy(CN). p. 356.22) である。『王伝』では「汝好作佛事。」(p. 118c8)、『王経』では「汝當作佛法饒益。」(p. 159a12)となっている。

〔と。〕

ウパグプタは言った。

「その様に致しましょう。」と。

それから、彼(=ウパグプタ)は法の聴聞〔の場〕において教導を求められた。そして、マトゥラーにおいて、話が広まった。

「ウパグプタという名の無相のブツダが、今日、法を説くであろう。」と。

そして〔それを〕聞いたので、数十万の人々が〔聴聞の場へ〕現れた。

そこで、ウパグプタ上座は瞑想に入ってから、観察した。

<如来の聴衆はどの様に坐したのであろうか。>〔と。〕

そして、

<聴衆は半月の形を取って〔坐して〕いた。>〔と、彼は〕知った。

さて〔更にウパグプタは〕観察した。

<如来はどの様に法の説示を行ったのだろうか。>〔と。〕

<先んじて行ふべき話をなして後、真実の顯示を行った⁽⁶⁰⁾。>〔と、彼は〕知った。

彼(=ウパグプタ)も、先んじて行ふべき話を行って後〔357〕真実の顯示を行い始めた。すると、マールはかの聴衆に向けて、真珠のネックレスの雨を降らせ、教導されるべき者達の心を掻き乱した。〔その結果、〕一人も真実を見ることをなさなかった。そこで、ウパグプタ上座は観察した。

<誰によってこの妨害が為されたのか。>〔と。〕

<マールによってである。>〔と、彼は〕知った。

さて、二日目には、より多くの人々が〔聴聞の場に〕現れた。

「ウパグプタが法を説いていると、真珠のネックレスが雨と降った。」と〔聞いたからである⁽⁶¹⁾〕。

さて、二日目においても、ウパグプタ上座が先んじて行ふべき話を行って後、真実の顯示が開始された時、また、マールがこの聴衆に向けて、黄金の雨を降らせた。〔すると、〕教導されるべき者達の心は動揺し、一人も真実を見ることをなさなかった。そこで、ウパグプタ上座は観察した。

⁽⁶⁰⁾原文は pūrvakālakaraṇīyāṃ kathāṃ kṛtvā satyasamprakāśanā kṛtā (Divy(V). p. 222.13-14; Divy(CN). p. 356.29-30) である。『王伝』では、「觀佛云何説法。佛先説於施論戒論生天之論。欲為不淨出世為要。如諸佛常法説四聖諦。」(p. 118c12-14) とされ、施論・戒論・生天之論を説き、欲が不淨であることと、出世〔間の法〕が重要であることをブツダが四聖諦に先んじて説いた、とされている。

⁽⁶¹⁾『王伝』は「雨真珠珍寶皆欲來取。以是因縁衆人多來。」(p. 118c18) として、Divy. と同様、多くの人が参集した理由が財宝を手に入れるためであったことを記すが、『王経』にはこの様な記述は存在しない。

<誰によってこの妨害が為されたのか。>〔と。〕

<邪悪なマーラによってである。>と〔彼は〕知った。

さて、三日目には、より多くの人々が〔聴聞の場に〕現れた。

「ウバグプタが法を説いていると、真珠の雨と黄金の雨とが降った。」と〔聞いたからである〕。

さて、三日目にも、ウバグプタ上座は、先んじて行すべき話を行って後、諸の真実を顕示することを開始した。すると、程遠くない場所で、マーラによって、劇の上演が開始された。そして、神々しき奏樂が鳴り響き、また、神々しきアプサラス達が舞踊を始めた。すると〔一旦は〕貪欲を離れた人々〔も〕⁽⁶²⁾、神々しき諸の様子を見、神々しき諸の音楽を聴いたので、マーラによって魅了されてしまった。ウバグプタの聴衆がマーラによって魅了されてしまったので、悦に入ったマーラはウバグプタ上座の頭に輪飾りを結びつけた。そこで、ウバグプタ上座は〔以下の様に〕精神を集中し始めた。

<この者は誰なのか。>〔と。〕

<マーラである。>〔と、彼は〕知った。

彼（＝ウバグプタ）には〔以下の様な〕考えが浮かんだ。

<このマーラは世尊の教えに対して大きな妨害をなした。何の目的で、世尊はこの者（＝マーラ）を調伏しなかったのだろうか。>〔と。〕

<この者（＝マーラ）は私によって調伏されるべきである。そして、彼（＝マーラ）に対する教導に基づき、衆生に対する救護に基づき、私は世尊によって無相のブッダと指摘されたのだ。>〔と、彼は〕知った。

そこで、ウバグプタ上座は〔以下の様に〕精神を集中した。

<この者にとっての教導の適時は訪れたのか否か。>と。

<教導の適時が訪れた。>〔と、彼は〕知った。

それから、ウバグプタ上座は蛇の屍と犬の屍と人間の屍との三つの屍を手に入れると、神通によって< 223 >花の輪飾りに変化させ、マーラのもとに近づいた。そして〔それを〕見たので、マーラには喜悦が起こった。

<ウバグプタすらも私によって魅了されたのだ。>と。

それから〔花の輪飾りを受けるため〕マーラは自らの身体を前かがみにした。ウバグプタ上座は自分自身で〔花の輪飾りに変化させられた各々の屍をマーラに〕[358] 結

⁽⁶²⁾原文は yāvat vītarāgo janakāyo divyāni rūpāni dr̥ṣṭvā divyāṃś ca śabdān śrutvā māreṇākṛṣṭaḥ (Divy(V). p. 222.25-26; Divy(CN). p. 357.16-18) である。この文中の vītarāgo janakāyo を、『王伝』は「未得道者」(p. 118c23) とし、『王経』は「衆人未得離欲」として Divy. の表現と異なりを見せる。

びつけ〔始め〕た。それから、ウバグプタ上座によって、マーラの頭には蛇の屍が結び付けられ、首には犬の屍が、そして、耳には人間の屍がぶら下げられた。それから、〔ウバグプタはそれらをマーラに〕取り付けると〔以下の様に〕言った。

「比丘に不似合いな輪飾りが、お前によって私に結びつけられた様に、欲望を有する者に不似合いなこの屍が私によってお前に結びつけられた。//18//
お前の持つ力、それを見せてみよ。今日、実に、お前はブッダの子と出会ってしまった。〔ブッダの子と争って何になる。例えば⁽⁶³⁾〕風によって乱された波のうねり⁽⁶⁴⁾が勢いを増したとしても、海水はマラヤ山の諸の懐の内に消え失せる⁽⁶⁵⁾〔様なものだ〕。//19//」〔と。〕

さて、マーラはかの屍を取り除こうとし始めた。最後まで、自分自身で攻撃を加えてみたが、蟻が山の王(=ヒマーヤ⁽⁶⁶⁾)を〔そうすることができない〕様に、取り除くことができなかった。〔マーラは〕力能わず、空中に舞い上がって⁽⁶⁷⁾〔以下の様に〕言った。

「もしも〔私が〕自分自身で犬の屍を首から外すことができないとしても、私より勝れた威光を有する他の神々が外してくれるであろう。//20//」〔と。〕

上座は〔マーラに〕言った。

「〔お前は〕ブラフマンや百の祭祀を持てる者(=インドラ)を、あるいは、燃えさかった炎や海を頼って行くがよい。しかしながら〔お前の〕首に位置するこの屍は、実に、腐ったり、また、干涸びたり、崩壊したりしないであろう。//21//」〔と。〕

(63) 『王伝』における「汝今何為而與佛子共鬥。如大海波浪觸頗梨山。」(p. 119a11-12) という記述により補足。

(64) この偈の全文は、yat te balaṃ bhavati tat pratidarśayasva buddhātmajena hi sahādyā samāgato 'si/ udvṛttam apy anilabhinnataraṃgavakraṃ vyāvartane malayakuṣiṣu sāgarāmbhaḥ//19//である。この内、「うねり」と訳したのは、Divy(V). における ...vakraṃ (p. 223.9) である。Divy(CN). では、...vaktraṃ (p. 358.6) となっており、これを採用するならば、「風(anila)によって海(taraṃga)は口(vaktra)を開け(bhinna)」と訳することができる。

(65) Divy(V). では、vyāvartane (p. 223.10) となっているが、これは Divy(CN). vyāvartate (p. 358.6) の転写ミスであると考えられる。ここでは、Divy(CN). vyāvartate (p. 358.6) を採用して訳す。

(66) 原語は adrirāja (Divy(V). p. 223.11-12; Divy(CN). p. 358.8) である。『王伝』では、「須彌」(p. 119a13) となっている。

(67) Divy(CN). では、utpādyā 「姿を現すと」(p. 358.9) となっている。ここでは、Divy(V). utpātyā (p. 223.12) に従う。

マヘンドラ・ルドラ・ウペンドラ・ドラヴィネーシュヴァラ・ヤマ・ヴァルナ・ク
 ベーラ・ヴァーサヴァ等を含めた諸の神を訪ねて、目的を全く果たせなかった〔マー
 ラ〕は、ブラフマンに近づいた。すると、彼（＝ブラフマン）は言った。

「愛しき者よ、許せ。

十力（＝ブッダ）の弟子が、自ら神通によって結果を与えた徴、それを破壊するこ
 とを〔かつて〕誰ができたであろうか。ヴァルナの住处（＝海）の境界線を〔誰
 も破壊することができなかつた〕様に⁽⁶⁸⁾。//22//

更に、蓮の茎で〔作った〕諸の紐で縛って、ヒマーラヤ〔山〕を取り除くことが
 できる者は居る、しかし〔その様な者である〕私〔も〕お前の首に取り付けられ
 たこの犬の屍を取り除くことはできない。//23//

私にも、好ましく偉大な力が存在する。そうだとすると、私は如来の子の力に匹
 敵しない。〔例えば〕、火を有する者⁽⁶⁹⁾達には、炎における〔光輝が〕必ず存在
 するとはいえ〔祭〕火におけるその光輝は、日輪におけるそれ〔の比では〕ない
 〔様に〕。//24//」〔と。〕

マーラは尋ねた。

< 224 > 「今〔あなたは〕何を指示して下さいますか。〔私が〕帰依する〔べきな〕の
 は誰なのでしょう。か。」と。

ブラフマンは答えた。

「その者と出会って後、神通力と名誉と安楽を失ったところのほかならぬかの者
 （＝ウパグプタ）に〔お前は〕急いで帰依せよ。なぜなら、凡そ、この世で、地面

(68) 『王経』(p. 159b29)は水が海岸線を破ることができない譬えを、Divy. (Divy(V). p. 223.23; Divy(CN). p. 358.18)と同様に記しているが、『王伝』は「假使毘嵐猛風不能吹卻。」(p. 119a23)として、猛風が吹いても退けられるという譬えを記している。

(69)この偈の全文は kāmāṃ mamāpi mahad asti balaṃ tathāpi nāhaṃ tathāgatasutasya balena tulyaḥ/ tejasvināṃ na khalu na jvalane 'sti kiṃ tu nāsau dyutir hutavahe ravimaṇḍale yā//24// (Divy(V). p. 223.26-29; Divy(CN). p. 358.21-23)である。「火を有する者」と訳した語は tejasvin (Divy(V). p. 223.28; Divy(CN). p. 358.22)である。『王伝』は対応する箇所が無い。『王経』には対応する偈があるが、後半の偈に対応する文は、

譬如餘光 不及火光 如此火光
 不及日光 (p. 159c5-6)

であり、tejasvin にあたる語は「餘光」と考えられる。しかし、それが具体的に何を指すのかは不明である。Divy. では、hutavahe の語が見られることから、バラモンを指しているとも考えられる。

に倒れた者は、その者は大地をとらえて、再び立ち上がる〔のだから〕。//25//」
〔と。〕

さて、マーラは如来の弟子の能力を理解したので〔以下の様に〕考えた。

[359] <ブラフマンが、その者の弟子達の教えをも供養するところの、かのブツダの能力を一体誰が押し量ることができようか。//26//

よき誓戒を有する彼 (= ブツダ) は、望めば、私に対していかなる罰を〔も実行することができたであろうに〕、しかし〔ブツダは〕忍辱によって⁽⁷⁰⁾、それを為さなかったのだから、私は彼 (= ブツダ) に保護されたのだ。//27//

多言を要しようか。

今日、甚だしき慈しみを自体とし、あらゆる苦悩から解放された心を有し、黄金の山の様な輝きを有する、かの牟尼 (= ブツダ) の大悲の性質を〔私は〕理解した。なぜなら、各々の場所において、迷妄という暗闇を有する私は、彼を各々の方法でもって妨害した。しかし、実にそれにも関わらず、力強き彼による不快な〔言葉を〕、私は全く聞かなかった〔からである〕。//28// >〔と。〕

さて、欲界の首長であるマーラは、

<他ならぬウバグプタのところを除き、別の行き先は存在しない。>

と知ったので、全て〔の行き先〕を放棄して、ウバグプタ上座の側に近づくと〔ウバグプタの〕両足に平伏して後〔以下の様に〕言った。

「大徳よ、以下のことを〔あなたは〕知らぬはずはありません。〔すなわち、〕菩提〔樹〕の根もとを含め、私によって以下の様にして世尊に対して数百の不快なことが為されたということ。『何処においてか。』⁽⁷¹⁾〔と云うならば〕、

かのガウタマは、バラモンの村邑の中の家屋において、私に近づいたが、ひとかけらの食べ物すら得られなかったのに、私に対して不快なことをなさなかった。//29//

雄牛となり、蛇の様に留まり、運び屋の姿となって、私はかの主 (= ブツダ) を

⁽⁷⁰⁾ Divy. は kṣāntiā 「忍辱によって」(Divy(V). p. 224.10; Divy(CN). p. 359.4) とするが、『王伝』は「大悲憐愍故」(p. 119b1) とし、『王経』は「但以慈悲故」(p. 159c15) とする。

⁽⁷¹⁾ 原文では kutas (Divy(V). p. 224.18; Divy(CN). p. 359.12) とのみ記され、誰の発言かは不明。『王伝』は「尊者問言汝作何事。」(p. 119b7) として、ウバグプタがマーラに尋ねた言葉とする。『王経』は対応する語を記さない。ここでは、マーラによる自問自答と解して訳す。

悩ませた⁽⁷²⁾。しかし、彼 (= ブッダ) は私を害しなかった。//30//
 一方、勇者よ、あなたが本来的に有している哀れみを捨て去ったので、神々とアス
 ラと〔それらの〕中間を含む諸の世界において、今日、私は嘲笑された。//31//」
 〔と。〕

上座は言った。

「邪悪な者よ〔お前は〕全く吟味することなく、如来の諸の偉大さと声聞とをどうし
 て結びつけるのか。

実に、メール山を芥子粒と等しいと〔お前は〕決定するのか。太陽を虫と〔等し
 いと〕、大海を球形のもの⁽⁷³⁾ (= 水滴) と〔等しいと決めるのか〕。実に、生類
 に対する十力 (= ブッダ) の哀れみは別物である。従順な者よ、実に、声聞には
 大悲は存在しない。//32//

さらに、

世尊は或る目的で、過失を有する〔お前〕をも赦免したのであるが、その理由を、
 今、私達は明らかに知った。//33//」〔と。〕

< 225 > マーラは言った。

「語れ。語れ。執着を断つべく、忍辱によって誓戒を保った、幸運を有する彼 (=
 ブッダ) の意図を。彼は〔私の〕迷妄により、常に私によって苦しめられたが、し
 かし、私は彼によって、慈のみを伴って眺められた。//34//」〔と。〕

上座は言った。

「従順な者よ〔お前は〕聞け。実に、お前は世尊に対して繰り返し繰り返し、過ちを
 犯した。しかし、ブッダに対して〔根を〕降ろした⁽⁷⁴⁾ 諸の不善法の浄化は、他なら
 ぬ如来に対する浄心 (prasāda) を除いて他にない。

(72) 『王伝』は「復於耆闍崛山化作大牛破五百比丘鉢。唯有佛鉢飛在虚空。我更於異時化作龍形。纏縛佛身
 七日七夜。佛臨涅槃時我化作五百乘車。擾濁河水令佛不得飲。」(p. 119b13-16) と記して、マーラによる
 妨害の詳細を示している。

(73) 原語は, maṇḍalin (Divy(V). p. 224.27; Divy(CN). p. 359.19) である。『王伝』は「一滴之水同于
 大海」(p. 119b21) と記し、『王経』は「取一掬水同於大海」(p. 160a1) と記す。ここでは、『王伝』の理
 解に基づき, maṇḍalin を「水滴」の意味と解する。

(74) Divy(CN). では, buddhāv āropitānām (p. 359.26) とされている。Divy(V). では, buddhāvaropita
 (p. 225.6-7) である。BHSD (avarupta, p. 74) では, avarupta-kuśalamūlā(h) (Mahāvastu. ii.314.11)
 の用例を挙げ, avarupta に対して”planted”の訳が与えられている。ここでは, Divy(V). に従い, avaropita
 を採用し, 「〔根を〕降ろした」と訳す。

以上の理由を、先見の明を持つ彼（＝ブツダ）は眺めていたので、この場合に、〔ブツダは〕お前に向けて、不快な〔言葉を〕語ることなく、他方、諸の快き〔言葉〕のみを語ったのである。//35//

この手段によって〔360〕思慮に勝れた彼（＝ブツダ）により、お前の心中において〔今〕信愛（bhakti）が引き起こされたのだ。実に、非常に僅かであっても、この者（＝ブツダ）に対する信愛は、賢明な者達にとっては、涅槃という果報を与えるものとなる。簡潔に言えば、牟尼（＝ブツダ）に対する迷妄にもとづく蒙昧なる心によって、お前により行われた罪、その一切は、お前の心中に得られた信（śraddhā）という諸の水の流出でもって浄化されたのだ。//36//」〔と。〕

さて、マーラはカダンバ〔樹〕の花の様に、毛穴を震わせ、身体全体でもって平伏した後〔次の様に〕言った。

「〔様々な〕場合に、彼（＝ブツダ）は〔願いを〕成就する以前、そして、大地において願いを成就した時まで、私によって様々な悩まされた。しかし、最勝の聖仙である彼によって〔それら〕一切は赦免された。〔恰も〕優しき父によって、息子の過ちが〔赦免される〕様に。//37//」〔と。〕

ブツダに対する浄心に心が満たされた彼（＝マーラ）は、非常に長い間、ブツダの諸の〔良き〕属性を憶念して後、上座の両足に平伏すると〔以下の様に〕言った。

「今日、あなたによって、私に対する最上の救護がなされた。すなわち、私の中にブツダに対する尊敬が浸透した。どうか、今、首に繋がれた、偉大な聖仙の怒りに基づく装飾品を〔あなたが〕慈によって、取り除かれるよう。//38//」〔と。〕

上座は言った。

「〔或る〕約束のもとで〔私はそれを〕解こう。」と。

マーラは尋ねた。

「約束とは何でしょうか。」〔と。〕

上座は答えた。

「今日より以後〔お前は〕比丘達を苦しめてはならない。」と。

マーラは宣言した。

「苦しめません。」〔と。〕

〔マーラは続けて尋ねた。〕

「他に何か指示なさいますか。」と。

上座は答えた。

「教えに対する〔お前の〕責務について、私の指示は以上のことだけである。〔次に、私〕自身に対する〔お前の〕責務について、お前に指示しよう。」「と。」

すると、マーラは動揺して尋ねた。

「上座よ、落ち着いてください。〔あなたは〕何を指示なさるのでしょうか。」「と。」

上座は宣言した。

「〔お前〕自身〔以下のことを〕知っていよう。〔すなわち〕私は世尊の般涅槃の百年後に出家した。それ故、彼の法身 (dharmakāya) は私によって見られた。〔しかし〕三界の主である彼 (= ブッダ) の、黄金の山に似た色身 (rūpakāya) は、私によって見られなかった。

< 226 > 従って⁽⁷⁵⁾、お前は、実に、比類無き救護〔それ自身である〕ブッダの形状 (vighraha) を顕示せよ。私にとって、実にそのことに勝る喜ばしきことは存在しない。実に私は十力 (= ブッダ) の姿 (rūpa) を〔見ることを〕望んでいる。//39//」「と。」

マーラは言った。

「それならば、私の約束事もお聞き下さい。

ここで、力づくで、かのブッダという装いを纏う〔私〕を眺めて、一切智者 (= ブッダ) の〔良き〕属性に対する尊敬により、あなたによって礼拝がなされてはならない。//40//

もしもあなたが、ブッダに対する憶念により飾られた心でもって、私に対して、僅かなりとも供養を示そうものなら、私は塵も残さず燃えてしまうであろう。貪欲が除かれた〔者に〕似つかわしくない礼拝という行為に耐えるためのいかなる能力が私に〔存在しょうか〕。〔恰も〕象の鼻の打撃に、エーランダ樹の諸の若芽が耐えられない様に。//41//」「と。」

上座も言った。

「その様にしよう。〔私は〕お前に礼拝するまい。」「と。」

[361] マーラは宣言した。

「それならば、私が園林の奥深くに入り終わるまでの間、しばらく、お待ちください。

計り知れない知性の威力に基づき存在した、熱せられた黄金の光輝を有するブツ

⁽⁷⁵⁾ Divy(V). では, tadanu tvaṃ anugrahaṃ ... (p. 226.1), Divy(CN). tad anudyam anugrahaṃ ... (p. 360.21) となっている。Divy(CN). を採用するならば「それ故 (tad), 言葉で表示できぬ (anudya) ...」と訳することができるであろう。ここでは, Divy(V). に従い, tadanu として訳す。

ダの姿は、かつて、シューラ〔という名の長者〕⁽⁷⁶⁾を欺こうと決意した私によって造作された。人々にとっての眼を喜ばす等〔の性質〕を有する、他ならぬかの姿を私は造作したが、それ(=造作されたブツダ)もまた、汚れなき太陽の光線の網を、光の輪の形で、発したのだ。//42//」〔と。〕

さて、上座は、

「その様にせよ。」

と述べて後〔マーラの身体に結び付けられていた〕かの屍を外すと、如来の姿を見ることを求め待っていた。一方、マーラは園林の奥深くに入って後、ブツダの姿を造作して、非常に魅力的な衣装を有する踊り手の様に、かの園林の奥深くから出て来ることを開始した。

実に〔誰かが〕述べるであろう。

「その時、最上の相を兼ね備え、人々の眼に寂靜をもたらす、美しい如来を顕現させつつ、その者(=マーラ)は、かの園林を飾りたてた。色鮮やかにして高価な絵画を披露しつつある様に。//43//」〔と。〕

さて、一尋の光輪によって飾られ、見るに愛らしき世尊の姿を〔マーラは〕化現し、右方にはシャーラドゥヴァティープトラ上座、左方にはマウドゥガリヤーヤナ上座、後方には手にブツダの鉢を持ったアーナンダ具寿、そして、マハーカーシャパ〔上座〕とアニルツダ〔上座〕とスプーティ上座を始めとする偉大な声聞達の姿を化現して後、千二百五十人の比丘達により半月形に取り囲まれたブツダの〔一連の〕外見を顕現せしめて後、マーラはウパグブタ上座のもとにやって来た。

一方、ウパグブタ上座には、

< 世尊の姿は、かくの如きであるのだ。 >

という喜悅が起こった。心に喜悅を起こした彼(=ウパグブタ)は、早速、座から立ち上がり、観察しつつ〔以下の様に〕言った。

< 227 > 「何ということか。この様な姿をも破壊してしまうものが、悲を欠いた、かの無常性である。伝説によれば、偉大な牟尼(=ブツダ)のこの様な身体は無常性を得て消滅に至ったのだという。//44//」〔と。〕

彼(=ウパグブタ)は、ブツダを抛り所とする憶念によって、また以下の様に、執着した心を有することとなった。すなわち、

⁽⁷⁶⁾ 『王伝』では、「我本曾作佛形誕首羅長者。」(p. 119c18)とする。ここから、この文でのśūra は、ブツダではなく、śūra 長者であることがわかる。

<私はブッダ・世尊を見ている。>

という〔思いが〕立ち現れるに至ったのである。彼(=ウパグプタ)は蓮の蕾の様な合掌を行って後、言った。

「ああ〔これが〕世尊の美しき姿である。多言を要しようか。

[362]この者(=ブッダ)は、顔の点では赤蓮華を凌駕し、眼の点では青蓮華を、〔容貌の〕美しさの点では勝れた花の集まりを、愛らしい性質の点では輝きに満ちた月を、深遠さという点では大海を、堅固さという点ではメール〔山〕を、光輝という点では太陽を、歩みという点では獅子を、凝視という点では雄牛を、色彩という点では黄金を〔凌駕する〕。//45//」〔と。〕

彼(=ウパグプタ)は更に一層、心は喜びに満たされつつ、行き渡る声で言った。

「ああ〔これは〕浄められた性質を有する諸の業に対しての甘き果実である。この造作された姿形は業に基づく〔果報な〕のであって、自在力によって〔あるいは〕偶然によって〔造作されたもの〕ではない。//46//

数千億劫に渡り、口・身・意によって生起した各々の〔業⁽⁷⁷⁾〕は、布施・忍辱・三昧・知性・制御⁽⁷⁸⁾でもって、かの阿羅漢(=ブッダ)により浄められた。人々の眼を喜ばせ、汚れを欠き、それを見たならば、敵すらも喜ぶところのこの姿形は彼(=ブッダ)によって生起せしめられた。〔誰が〕「私と似る」〔と言うことが〕あろうか。//47//」〔と。〕

〔ウパグプタは、このブッダの姿が〕等覚者に依拠した諸のものによって〔引き起こされた〕想起であることを忘れ⁽⁷⁹⁾、ブッダについての想起に基づき、根を断たれた樹木のように、身体全体でもって、マーラの両足に対して平伏した。そこで、マーラは慌てて言った。

「大徳よ〔あなたは〕その様に、かの約束を破ってはなりません。」「と。〕

上座は尋ねた。

「約束とは何か」と。

マーラは答えた。

(77) 『王経』の「修淨身口業」(p. 160c9)により補足。

(78) 原文は、dānaḥāntisamādhībuddhīyamais ... (Dīvy(V). p. 227.16; Dīvy(CN). p. 362.11)

(79) 原文は、saṃbuddhāmbanaiḥ saṃjñāṃ viśmṛtya ... (Dīvy(V). p. 227.19; Dīvy(CN). p. 362.16)

である。ここでの saṃbuddhāmbana は、ブッダの外見的な特徴を指すと考えられる。尚、これに相当する箇所は『王伝』では「觀佛心至忘不憶本要。」(p. 120a12)、『王経』では「思惟念佛故不覺是魔。」(p. 160c13)となっており、Dīvy. におけるものと逐語的一致を見ない。

「大徳は宣誓したではありませんか。『私はお前に礼拝をするまい。』」と。
すると、ウパグプタ上座は地面から起きあがって、口籠りながら⁽⁸⁰⁾言った。
「邪悪な者よ、

論議者中の最勝者 (= ブッダ) が、水をかけられた火の様に消滅に至ったのを、実に、私が知らぬことはない。しかし〔見る者の〕眼を喜ばず、かの者 (= ブッダ) の姿を見たので、私はかの聖仙に礼拝をしたのであって、お前を賞讃しているのではない。//48//」〔と。〕

マーラは言った。

「ここで、果たして私が賞讃されていないことになりましょうか。なぜなら、その様に〔あなたは〕私を礼拝しているのです〔から〕。」と。

上座は言った。

「〔お前は〕聞け。一方で、他ならぬお前が私によって賞讃されているのではないし、また〔他方〕、私は約束を破ってはいないのだ。」と。

〔上座は続けた。〕

[363] < 228 > 「〔例えば〕土でできた神々の像⁽⁸¹⁾に対して、人々が、土についての想起を抱くことなく⁽⁸²⁾、神々についての想起を伴って礼拝を行う様に。//49// その様に、私は実に、世界の守護者を具現化したお前を眺めたので、マーラについての想起に対して尊敬することなく、善逝についての想起を伴って礼拝したのである。//50//」〔と。〕

そこで、マーラはブッダの外見を消失させると、ウパグプタ上座を賞讃して後立ち去った。

さて、マーラは第四日目に、自らマトゥラーにおいて鐘を響かせ始めた。〔そして、マーラは宣説した。〕

「お前達の中で、天界における至福と安楽を望む者、その者はウパグプタ上座のもと

⁽⁸⁰⁾原文では *sagadgadakaṅṭho* (Divy(V). p. 227.22; Divy(CN). p. 362.22) となっている。『王伝』はこれに対する語は無いが、『王経』には「小聲答言」(p. 160c18) という Divy. と似た表現が見られる。

⁽⁸¹⁾『王経』は「譬如以土為佛。」(p. 160c22) として、Divy. や『王伝』と異なり、神々の像ではなくブッダの像としている。

⁽⁸²⁾原文は Divy(V). では *mṛtasamjñām anādr̥tya ...* (p. 228.2) であり、Divy(CN). では *mṛtsamjñām anādr̥tya...* (p. 363.2) となっている。mṛta- と mṛt- という点で異なるが、『王伝』では「不禮泥木。」(p. 120a20)、『王経』では「不作土想。」(p. 160c22) として、いずれも mṛt- を支持する。従って、ここでは Divy(CN). の *mṛtsamjñām* を採用して訳す。

で法を聞け。また、如来を見ることのなかったお前達はウパグプタ上座を見よ。」と。そして〔マーラは続けて〕言った。

「この世において、不幸の根源たる貧困を捨て去って、輝きに富む幸運を望む者、そして、天界における至福を望む者⁽⁸³⁾、その者は、信を伴って、かの者(=ウパグプタ)から法を聞け。//51//

或いは、二足の内の最勝者にして大悲者、自在者である師(=ブッダ)を見なかった者達、その者達は、師に似て輝く三つの生存における灯であるウパグプタ上座を見よ。//52//」〔と。〕

さて、マトウラーにおいて話が広まった。

「ウパグプタ上座はマーラを調伏した。」と。

そして〔それを〕聞いたので、マトウラーに住していた人々は、その大部分が、ウパグプタ上座のもとに現れた。それから、ウパグプタ上座は集まった数十万のバラモン達の中で、恐れを欠いた獅子の様に、獅子座に登った。また〔ウパグプタは〕言うであろう。

「私を前にして、彼ら無知なる者達が、獅子座に登ることはできない。何故なら、その様な者が獅子座に居ると、その者は鹿の様に萎縮してしまう〔から〕。//53//しかし、他の論議者の傲慢⁽⁸⁴⁾を滅するために叱責する、獅子の様に恐れを欠いた者は、語り手の内の獅子であり、獅子座に登るのに相応しい。//54//」〔と。〕

さて、ウパグプタ上座によって、先んじて行すべき話がなされて後、諸の真実の顕示が〔行われた〕。そして〔それを〕聞いたので、数十万の者達は、解脱に属する諸の善根を手に入れた。或る者達によっては〔364〕不還果が得られ、或る者達によっては、一來果が〔得られ〕、或る者達によっては、預流果が〔得られ〕、そして、一万八千〔の者達〕が出家した。そして〔出家生活と⁽⁸⁵⁾〕結びついている全ての者達に

⁽⁸³⁾ 『王伝』はこの偈を記さない。『王経』では、

若人欲富貴	不樂於貧窮
若樂天上樂	及大涅槃樂
悉當聽受法	思惟其義趣 (pp. 160c29-161a2)

として、「天上樂」に続いて「大涅槃樂」を挙げる。

⁽⁸⁴⁾ Divy(V). では pravārīdarpa... (p. 228.22) となっている。pravara を ari に対する形容詞と解すると文脈にそぐわない。ここでは、文脈から Divy(CN). paravādidarpa... (p. 363.25) を採用して訳出する。

⁽⁸⁵⁾ 『王経』における「乃至一萬八千人出家思惟坐禪精進修道得阿羅漢果。」(p. 161a18) という文により

よって、やがて、阿羅漢果が得られた。

そして、かのウルムンダ山において、奥行きが十八ハスタ、幅が十二ハスタの洞窟⁽⁸⁶⁾が〔存在した〕。彼ら(=ウパグプタの弟子達)がなすべきことをなし遂げた時⁽⁸⁷⁾、その時、ウパグプタ上座によって〔以下の様に〕告げられた。

「私の教誡により全ての煩悩を取り除いて阿羅漢果を証得した者、その者は四アングラの長さの棒⁽⁸⁸⁾を洞窟の中に入れなさい。」〔と。〕

そこで、一日中に数万の阿羅漢達によって棒が〔その洞窟に〕入れられた。〔そして〕大海に至るまで彼(=ウパグプタ)の名声が広まった。

「マトゥラーに〔居る〕 < 229 > ウパグプタという名の者は、世尊によって教誡者の内の最勝者であると指摘された。」〔と。〕

すなわち、実に、欲界の自在者(=マーラ)を調伏した、第二の師に相応しき、偉大な人物であるウパグプタ上座が、神々と人とマホーラガとアスラとガルダとヤクシャとガンダルヴァと賢者達により両足を敬礼された時〔ウパグプタが〕過去のブツダという土地に蒔かれた善〔根〕という種子の相続を有する数十万の衆生達に対して、正法という水〔を含有する〕雨雲からの〔雨水の〕落下によって、諸の解脱の蕾を育成しつつあったのは、ウルムンダ山において〔であった〕。

キーワード: ウパグプタ, アショーカ, マーラ

補足。

⁽⁸⁶⁾原文では *tatra coruṃṇḍaparvate guhā aṣṭadaśahastā dairghyeṇa dvādaśahastā vistāreṇa* (Divy(V). p. 228.28; Divy(CN). p. 364.4-5) となっており, *guhā* の語が見られる。『王伝』は「於優留曼荼山作房。廣二丈四長三丈六。」(p. 120b2) とし, 房が造られたとする。『王経』は「於大醜山有石窟。長十八肘廣十二肘。」(p. 161a19) とし *guhā* を「石窟」と訳している。

⁽⁸⁷⁾原文は *yadā te kṛtakaraṇīyāḥ saṃvṛttās* (Divy(V). p. 228.28-29; Divy(CN). p. 364.5) となっている。『王伝』はこの文の相当箇所を欠く。『王経』は「是時諸弟子已作所作竟」(p. 161a20) とする

⁽⁸⁸⁾この文章は冒頭においても見られた。しかし、ここにおける *śalākā* 「棒」(Divy(V). p. 228.30; Divy(CN). p. 364.9) と異なり、冒頭の文章では, *śanakā* 「麻の断片」(Divy(V). p. 216.18; Divy(CN). p. 349.4) とされる。